

29. シイタケ栽培試験

(1) ほだ付率の向上に関する試験

鳥海 晴夫

〔目的〕

都市化の進展に伴って、シイタケ伏込み場の環境が年々悪化し、ほだ付率の低下を招いている。そこで、ほだ付率を向上させるため、成形駒や原木の伐期・長さについて試験したので報告する。

〔方法〕

1991年1月にコナラ原木に市販菌を接種し、管理・発生は通常の方法で行った。駒別ほだ化試験は、成形駒と通常の種駒について試験した。原木の伐期別ほだ化試験は、紅葉期の11月、落葉後の12月、厳寒期の1月に伐採し、それぞれ即、1ヶ月後、2ヶ月後に玉切り9試験区とした。原木の長さ別ほだ化試験は、原木の長さを90cm、80cm、70cm、60cm、50cm、40cmの6試験区とした。

〔結果〕

1. 駒別ほだ化試験 (図-1、2)

ほだ付率は、成形駒と種駒を比較した場合、成形駒が表面で7%、横断面で14%、表面×横断面で19%高く、ほだ付率の向上には成形駒の利用が有効であった。

発生量は、3回発生操作した合計では大差なかったが、初回の発生量は、成形駒が種駒の52%増であった。これは成形駒のほだ付率が高く、シイタケ菌の熟成が早まったためと思われる。発生量については、93年度も継続して実施し、今後はオガクズ菌、成形駒、種駒を利用した経済性について検討する必要がある。

2. 伐期別ほだ化試験 (図-3、4)

含水率が順調に減少したのは、11月、12月伐採で1、2ヶ月後玉切り区であり、伐採即玉切りの場合は水分の抜けが1~2ヶ月程度遅くなった。1月伐採は、水分の抜けが極端に悪く、11月、12月伐採の含水率と同程度になったのは7月頃であった。

ほだ付率の調査は5月と7月に実施したが、含水率の高い即玉切区が若干ほだ付率が高くなった。

発生量は、3回の発生操作では大差なかったが、93年度も継続調査中である。

3. 原木の長さ別ほだ化試験 (図-5、6)

ほだ付率は、表面はほとんど差がないが、横断面は原木が短くなると低下する傾向があった。

発生量は、ほだ木が長くなるにつれて増加する傾向を示した(相関係数0.94)。ほだ木が短いと木口からの蒸散が早く、乾燥ぎみの状態がきのこの芽切りに影響を与えていると思われる。発生量については93年度も継続調査中である。

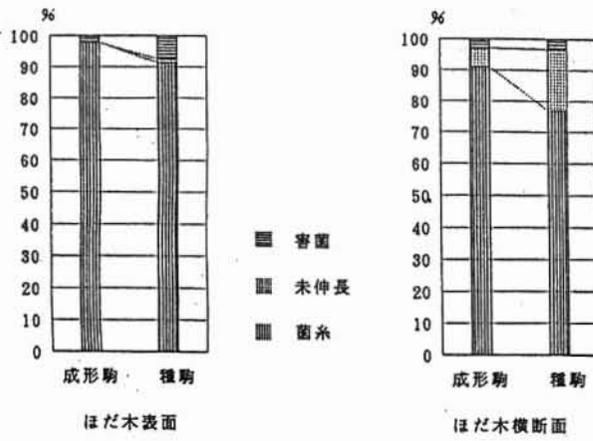


図-1 種駒の種類によるほだ付率

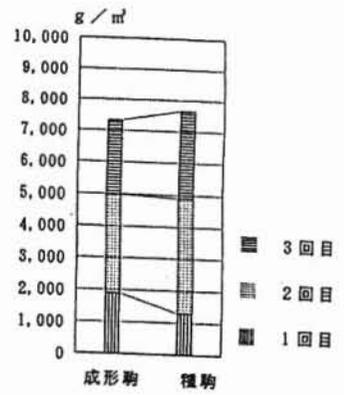


図-2 種駒の種類による発生量

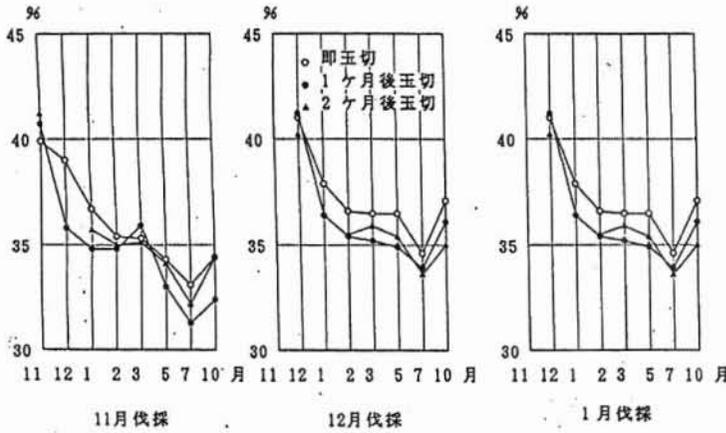


図-3 伐採時期による含水率の推移

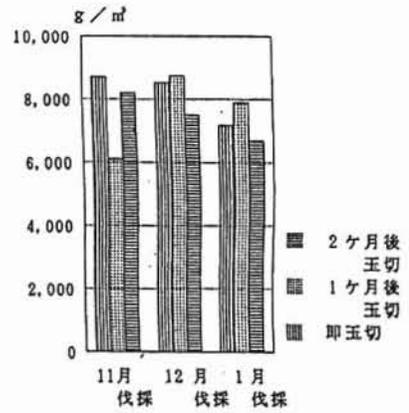


図-4 伐採時期別発生量(乾重)

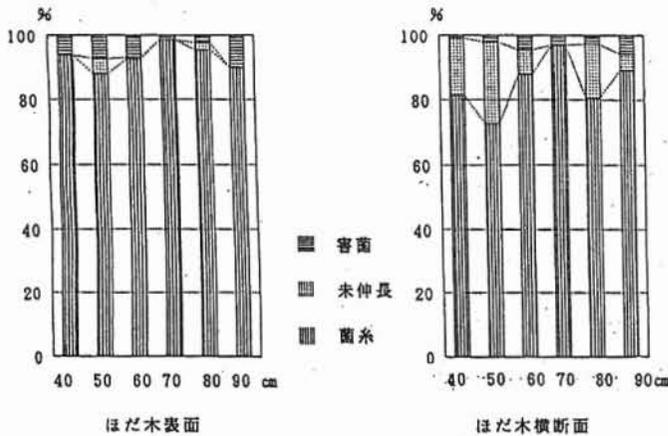


図-5 ほだ木の長さによるほだ付率

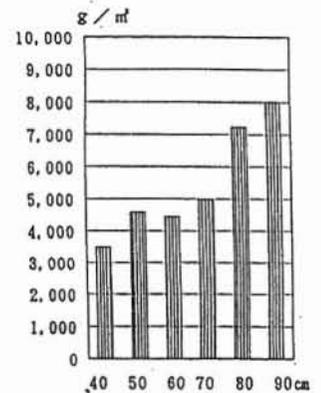


図-6 ほだ木の長さによる発生量